美術科教育学会通信 №50

２００３年９月２２日発行

事務　／通信　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１
東京学芸大学　美術学科　美術科教育学研究室内　柴田和豊宛
Ｔｅｌ．／０４２（３２９）７６０８　Ｆａｘ．／０４２（３２９）７５９９（柴田直通）
Ｔｅｌ．／Ｆａｘ．０４２（３２９）７５９４（相田直通）
Ｅ－Ｍａｉｌ．/kshibata@u-gakugei.ac.jp（柴田）　/aidaman@u-gakugei.ac.jp（相田）

海外の学会の情報から
英国美術デザイン教育学会報告

直江俊雄（筑波大学）

６月下旬，宮脇理先生とともに英国を訪れ，　各地のアーカイブや図書館で美術教育に関する文献資料を調査しました．その途上，英国美術デザイン教育学会の大会日程と重なりましたので，先生とともに参加する機会を得ました．本学会と共通する課題も多いと思われますので，私たちの見聞きした範囲から，大会の要点を報告させて頂きます．

同学会の淵源は1888年に設立された美術学校長の団体にあり，その後，普通教育の拡張に合わせて1944年に英国美術教育学会へと発展，さらに1984年，かつてハーバート・リードらを中心として発展した「芸術による教育」学会（1940年設立）との合併により，　現在の学会組織が誕生しました．会員数は調べられませんでしたが，参考までに2002年度の年間予算は287,493ポンド（約５千万円），　そのうち会費収入が172,743ポンド（一般会費は年72ポンド）となっています．また，参加は自由ですが労働組合としての機能があります．出版関係では，年３回の学会誌発行，約130冊に上るという関連専門書の販売，そして本年から新しく小学校の教師向けの実践情報誌『START』を創刊しています．

現職教員の研修プログラム提供や社会へのアピールも重要な活動です．代表的なものとしては，「アーティスト・ティーチャー・スキーム」と呼ばれる現職教員の研修会を全国の大学や美術館を会場に展開，また，「描く力」の復権を訴える「パワー・ドローイング」のキャンペーンやワークショップを開催，そのほか，今回の大会でも紹介された，「メイキング・イット・ワーク―工芸教育を学びの中心に」というプロジェクトや，教育実践の成果を一同に展示する「美術・デザイン・ディレクトリ」などがあります．

このような成果にもかかわらず，今回の大会には，美術・デザイン教育をとりまく厳しい状況が，率直に反映されていたと思います．当初，大会は５月に有名な博物館を会場として大規模に計画されていたのですが，参加者数が伸びずに延期となり，６月28日の一日だけ，キャンバウェル美術大学を会場に開かれることになったのです．美術に限らず，教科教育の大会開催は困難を抱えている例が多いとのことでした．参加者は約50名，発表は８件，発表はすべて「工芸とデザイン：今どこに？」という大会テーマのもとに選定された，学会の指導的な研究者による充実したものでした．テーマ設定の理由は，教科名が「美術」から「美術・デザイン」へと変更された（1999年のナショナル・カリ

キュラム改訂．小学校から中等学校まで同じ教科名）にもかかわらず，実際の学校教育では伝統的な工芸やデザインの学習が軽視され，ファイン・アートを中心とする傾向がより強まっているとの調査結果によるものでした．

発表の中では，情報技術を用いた全く新しいデザイン教育を目指すべきであるとした教育コンサルタントのトリストラム・シェパード氏，素材と関わる知的なプロセスである工芸の技能の復権を訴える，ラフバラ美術大学のデイヴィッド・ポストン氏，これまでの工芸教育では全く無視されてきた「家庭における工芸」に関する調査報告をしたローハンプトン大学のレイチェル・メイソン氏などが，それぞれ異なった視点から興味深い議論を提供していました．また，「視覚の実習」という包括的な概念でこれまでの「美術・工芸・デザイン」という構造の境界を解消していこうというバース・スパ大学のジューン・ビアンキ氏の主張には，工芸やデザインという学習領域を明確に確立すべきか，より広い概念の中に解消した方がよいのか，活発な議論が展開されていました．

何人かの参加者の方々と懇談した中では，宮脇先生がかつて教科調査官として中学校美術科に工芸の領域を確保したことについて，「どのような理論的裏付けによって政府を説得したのか」と英国の研究者が強い関心を示していたことが印象的であり，手でものを作る教育の存続に，非常な危機感をもっていることがうかがえました．同学会のアラステア・レイン会長は，私たちと挨拶した際に，この大会が私たちに有益だったかどうかととても気遣ってくださり，日本の学会との交流を期待されていました．大会の最後に，物静かな同会長が，困難な中でも，良い実践と研究を着実に結集して状況を変えていこう，と参加者に力強く訴えていましたが，状況を悲観するだけではなく，あくまでも多くの研究者に勇気と指針を与えていこうとする指導者としての姿勢に，共感と反省を抱いて帰国しました．

訂正

学会通信第49号の学会記事及び大橋晧也氏の文章に誤植がありました．ここにお侘びして訂正させていただきます．

3頁右下写真キャプション
和田氏→山口氏
16頁第5行，第6行　目本→日本
16頁第8行目，15行目　対時→対峙
16頁第20行目
民主主義的人間→民主的人間

＊　＊　＊

■新入会員の紹介■

高橋　愛（茨城大学大学院教育学学研究科）
黄　香淑（慶北大学校師範大学中等教育研究所）
遠藤友麗（聖徳大学）
普照潤子（神戸大学総合人間科学研究科）
大成哲雄（文教大学）
石井壽郎（武蔵野大学）
奥西麻由子（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）

＊　＊　＊

美術科教育学会　東地区会
開催された地区会の報告

東地区会では，第４回東地区会（研究発表　会ｉｎ函館），第５回東地区会（宇都宮美術館）の２つの地区会が開催されました．このうち第４回東地区会について，報告いたします．　なお，岡本会員企画による第５回東地区会については，次号で報告予定です．

第４回東地区会（研究発表会ｉｎ函館）
ー地域から今後の美術教育を考えるー

宮脇　理（元 筑波大学）

標題の研究発表会は７月２６日函館において開催され，１５０人を上廻る参加者を迎えて盛会裡に幕を閉じた．

このたびの企画は，担当理事（宮脇）の趣意を受けて，北海道教育大函館校の佐藤昌彦会員が，地区の要望を勘案する方向で実施を具体化したものである．内容は当日配布の冊子に収められているので参照されたい．（註＊）

運営の詳細については，佐藤昌彦氏の報告に移すとして，研究主題については，既報の学会ニュース４９号に重ねて，筆者は「・・・・・・　『地域から今後の美術教育を考える』は，恒常的に〈地域主義〉〈地域文化〉を掘り起こし，さらに先行研究・状況を超えた具体的な個々の事例に眼な差しを移そうとするものです．・・・」，さらに続けて「・・・かつて世間を前にして立松和平氏が〈一極化・集中化〉の速度が速まる頃に著した『遠雷』，そこにみられた宇都宮という地域が，都市と美しい田園の里という二つの顔を持っていた時のバランスが，時代と共に急速に雪崩れ，変貌した時代に提起した〈あの時〉から二十年，いまのことをどう考えたよいのかにも重なることです．・・・後略・・・」と．次いで「1994年９月２０日，当学会の開催が今回と同じく北海道教育大学・函館校において実施され，その際，併催したのが公開シンポジウム，通称〈出前シンポ〉であり，テーマは〈地域差から問う今日の美術教育〉にも触れたことを前置きとし，〈地域から今後の美術教育を考える」〉というこのテーマは今後も繰り返し登場する広義の文化，そして教育を巡る問題であるとして挨拶にかえた．

２６日当日の研究会を終了した現在，地区研究会の担当（企画）理事としての立場から，若干の感想を述べるならば，以下の三点を挙げることができようか．

一つは，地域問題を課題とする場合，いや地域に限らず文化や教育を対象とする場合，「場」の構成，認識を改めることが，まずは必須であると考える．それは地域・文化への直視を，これまでの「場」を拡げた状況の中で焦点化しようとする方向である．「場」を拡げるということは，視野の拡大である．視野狭窄からの旋回である．「一極集中・対・地域」という構図をより拡げた「場」で考えてみようということである．ありていに云えば「複数の歴史」を同時にみる「視座」を用意することである．常識的な言葉でいえば「オープン・ザ・ドア」「オール・ゲイト」「枠をはずす」・・・といったありようを想定することであり，その中で地域・文化・教育を考えようとするものであるが，当然の事

ながら同時に複数の問題に眼を移すことは骨の折れる事であり，従って二つ目の作業を準備しなければならない．

それは「アーカイヴ」という作業である．このコンセプトについてはそう目新しいものではないが，アーカイヴすなわち「資料保存」は，時間と根気を必要とし，かつ人々の連携を根底にしなければ成立させることは不可能である．さきに地域と文化の問題は繰り返したち顕われると述べたが，「アーカイヴ」への作業によって，一番目の内容はかなりメタレベルの段階へ進むことが可能となろう．一過性の問題提起とならないためにも，この営みを避けることは出来ない．

三つ目は視点を移すことである．前後左右に目を移すことは複数の歴史を視野に収めることであり，アーカイヴとの連動によって可能であるが，さらに長距離へ視野を拡げ，意識を投げかけるには「if：もしも」というキイが必要である．むろん歴史に「if：もしも」はないが，「もしも：if」を考えることで，定形的な対立，不毛な抗争を超えて，あるべき理想を探ることができるのではないかという考えである．

前後しましたが，発表会の前日，25日には（前日懇親会）が佐藤氏によって企画され，これも盛大な「プレ研究会」となった事を記します．なお，東京からの参加は，柴田和豊代表をはじめ8人．/（註＊）今回の冊子は《こどもの城造形事業部》の岩崎清会員の編集作業によるものです．深謝．

＊　＊　＊

研究発表会 in 函館　報告

佐藤昌彦（北海道教育大学函館校）

第4回美術科教育学会「東地区」研究発表会 in 函館は，7月26日（土），函館市芸術ホール・地階ギャラリーで開催された．テーマは「地域から今後の美術教育を考える」．北海道，東北，関東から，教員，院生，学生，美術館・北方民族資料館の関係者など152名が参加して，ゲスト発表，アイヌ民族の伝統楽器ムックリの演奏，講話，研究協議会などが行われた．以下は発表要旨にかかわる部分を当日の冊子から抜粋したものである．

《趣意説明》『地域主義と文化の現在』宮脇理氏（元筑波大学教授）「『地域から今後の美術教育を考える』は，恒常的に『地域主義』『地域文化』を掘り起こし，さらに先行研究・状況を超えた具体的な個々の事例に眼な差しを移そうとするものです」

《ゲスト発表》『美術教師への期待』紀谷義彦氏（前北海道上磯町立上磯小学校校長）「学校の教育活動が，真に子どもの望ましい成長に寄与するには，父母や地域の理解と協力の下に，教職員が一丸となって子どものために懸命に取り組む姿勢と気力が必要です」

《ゲスト発表》『子どもと美術館とのかかわりを求めて―もう一つの美術教育をつくるために』青野昌勝氏（前北海道立函館美術館館長）「自分の目で見，感じ，考える，主体性のある子どもたちの育成のために，多様な表現と主張のある美術の役割を重視し，美術館の整備と活動の充実を目指す必要がある」

《研究発表》『地域から美術教育を考える』　仲瀬律久氏(聖徳大学教授)「今求められているのは，自分の住む地域を愛し，地域の美術教育に情熱を燃やし，バイタリティをもって美術教育の理論と実践を結びつけ，強力なリーダーシップを発揮することができる実力ある指導者の輩出である」(誌上発表)

《アイヌ民族の伝統楽器ムックリの製作過程と演奏》鈴木政昭氏・鈴木紀美代氏(平成13年度全道ムックリ大会優勝，平成14年度世界口琴会議ノルウエー大会日本代表)参加者にプレゼントされたムックリは鈴木夫妻が製作したものである．

《講話》『アイヌ文化に学ぶ』大橋晧也氏(上越教育大学名誉教授)「いま，改めてアイヌ文化に学ぶ所以は何か，それは人間も自然の一部にすぎず自然に支えられてこそ人間は生きられるのだという彼らの考え方や生き方に学ぶことである」

《美術科教育学会代表理事挨拶》柴田和豊氏　(東京学芸大学教授)「様々な豊かさが内蔵されているテーマだと思います．私の場合は，地域特性の問題とともに，地域が気付かせてくれる普遍的な事柄にも注目していこうと思っています」

冊子は岩崎清氏(こどもの城)に編集(表紙の作成も含む)していただいた．会場に展示されたアイヌ民族の樹皮衣や木綿衣はアイヌ文化振興・研究推進機構の収蔵品である．また，前日の懇親会には21名，当日の歓迎レセプションには53名の方々が出席された．

なお，今回の研究発表会の開催にあたっては，函館市美術教育研究会によって実行委員会が組織され，準備や運営面などで強力な支援を受けた．実行委員長は橋本紀勝氏(上湯川小学校校長)，事務局長は鈴木秀明氏(湯川小学校教諭)である．さらに北海道教育委員会，青森県造形教育連盟，渡島美術教育研究会，檜山造形教育研究会，北海道立函館美術館，函館市北方民族資料館，アイヌ文化振興・研究推進機構，美術教育に関する出版社の方々からも温かい支援を受けた．

発表者の方々をはじめ，ご参加いただいた方々，そして本研究発表会開催のためにご尽力をいただいた多くの方々に，心から感謝を申し上げる次第である．

＊　＊　＊

美術科教育学会　西地区会
―開催された地区会の報告と今後の予定―

第3回西地区会(フォーラムin名古屋)が，7月5日〔土〕に開かれました．この報告と今後の開催予定をお知らせいたします．なお，同封の西地区会案内の文面は，会員以外の一般参加者も意識したものとなっています．案内を複写の上，配付・宣伝下さい．

第３回西地区会
（フォーラムｉｎ名古屋）

ふじえ　みつる（愛知教育大学）

第３回西地区会（本年度第１回目）が，７月５日〔土〕に愛知県芸術文化センターの12階「アートスペースＡ」で開かれました．

今回は，愛知県美術館と学会との共催ということで，美術館が以前より行なってきた教員との交流会を兼ねた研究会にしました．最初に市川愛知県美術館長から，期待を込めた挨拶がありました．その後，「美術教育フォーラムー美術鑑賞教育の広がりと深まり」というテーマに関して，ふじえによる趣旨説明があり，以下のように５件の発表がありました．

・藤島美菜（愛知県美術館）「美術館と学校の共有の場をもって」
・浅尾知子（白鳥小学校）「おもいあふれる創造活動を目指して」（美術館見学の事前・事後指導）
・林　成子（名和小学校）「児童自らが開く感性の扉」（アート・ゲームの活用例）
・岡田大介（原中学校）「美術館や美術作品とのよい出会いを」（美術館見学を学校全体の計画へ）
・小崎　真（前・一色中学校／豊明小学校）「『最後の晩餐』の謎を解き明かそう」（CG　複製の活用）

フォーラムでは，鑑賞と表現との関連，美術館利用の方法，鑑賞学習の評価，鑑賞作品の選定など多様な観点からの質問が出されました．評価に関しても，具体的な方法などが示され，問題意識の共有ができたと思います．埼玉，東京，鹿児島，兵庫，岡山，大阪を含め，遠方からも多数，参加していただき，発表者も含めると100名近くになりました．

なお，当日，会場にて500円で頒布した資料（Ｂ５版35頁の冊子）の残部があります．御希望の方は図書券〔500円分〕と送料〔切手160円分〕を同封し下記まで郵送して下さい．

〒448-8542　刈谷市井ケ谷町広沢１
愛知教育大学　第４部　美術教育講座
ふじえ　みつる Tel.&Fax.0566-26-2444
mfujie@auecc.aichi-edu.ac.jp

＊　＊　＊

今後の予定１
第２６回美術科教育学会広島大会プレ学会＆第４回西地区会（in広島）のご案内

広島大会　事務局

来年３月20.21日の両日，広島大学を会場にして，学会本大会が行われます。研究発表申込用紙を同封しました。大学法人化の直前という慌ただしい時期ではございますが，奮ってご発表下さいますよう，お願い致します。

広島大会では，日々子どもたちと接しておられる先生方と親しく意見交流することを主軸に，「実践と理論の統合」の筋道を探ることができたらと考えております。「実践と理論の乖離」現象についてはしばしば指摘されるところですが交流のチャンスが極めて少ない美術教育の実態の中にあっては必然の現象であったかもしれません。広島大会は，先生方に

とっても研究者にとっても，本音の交流を通した，稔り多き大会にすることが大きなねらいです。

大会企画の一つとして，「哲ちゃん」こと岩下哲士さんのトークを予定しています。卓越した色彩感覚と構成力によって注目される岩下さんは，仏像や花，動物などといった命あるものへの限りない愛情を自由奔放に描き出します。表現の本質のみならず，美術教育のあり方について大きな示唆をいただけると考えています。

もう一つの大会企画として，シンポジウムを予定しています。アーカイブを機軸にしながら，美術教育の過去・現在・未来を照射する試みです。美術教育を俯瞰した活発な議論を期待しています。詳細は最終案内でお知らせ致します。

さて，10月18日（土）には，本大会に先行して，西地区会研究会との共催という形でプレ学会を開催致します。気鋭の実践者，研究者が「基礎・基本」について発表し，諸外国におけるそれと比較しながら多面的に検討します。多数ご参加下さいませ。

＊　＊　＊

今後の予定2

第5回西地区会(研究発表会in奈良)

25年を経た「造形遊び」の功罪－〈新たに切り拓いた道〉と〈巻き起こした混乱・誤謬〉－

1，日時　平成15年(2003)12月20日(土)
午後12：30～17：00

2，会場　奈良市高畑町　奈良教育大学附属教育実践総合センター
多目的ホール

3，主催　美術科教育学会，奈良教育大学美術科教育研究室

4，当日は，発表内容をまとめた資料冊子をお配りいたしますが，この資料代が500円の予定です．

5，内容

○受付12：00－12:30

○挨拶・趣意説明　花篤實(西地区会統括理事・大芸大教授)

○「造形遊び」の歴史と教育現場の意識
- その歴史
  宇田秀士(奈教大助教授)
- 小学校の現場から
  宮崎藤吉(生駒市立俵口小教諭)
- 中学校の現場から
  山口二三八(香芝市立香芝西中教諭・奈教大院生)
- 高校の現場から
  足立元(県立奈良高等学校教諭)

○「造形遊び」の可能性と新たな位置づけ
永守基樹(和歌山大学教授)

○発表に対する質問・意見交換と討議会
指定質問者・討論者
- 花篤實(大芸大教授)
- 西久保勝康(奈良県図工・美術教育研究会会長・山辺郡山添中学校校長)
- 吉村茂(生駒市立生駒東小学校教諭)

○終わりの挨拶
福本謹一(西地区会担当理事・兵教大教授)

終了後，希望者による懇親会をもつ予定．

参加自由(学会会員以外の方々も参加できます)．参加希望の方は，準備の都合上，12月5日(金)までに，同封の案内を参照の上，下記までFAX，メール，郵送のいずれかで御連絡下さい．

申込先　宇田秀士　奈良教育大学
〒630-8528　奈良市高畑町
TEL・FAX 0742-27-9223(研究室直通)
Eメール　udah@nara-edu.ac.jp

＊　＊　＊

特集「元気なヒト，げんきな活動」2

パブリックアートで社会へ発信
―「富山のここにこんなパブリックアートを」の実践を通して―

松田　真治
（富山大学大学大学院・県立高岡養護学校）

はじめに

この実践は，昨年９～12 月にかけて，富山大学教育学部附属中学校２年生160 名を対象に，同校の城石和良教諭の協力を得て行ったものである．事前（夏休み）には，「松川べり彫刻オリエンテーリング」（ワークシートを利用したパブリックアートの鑑賞），「パブリックアート・ウォッチング」（身近な環境からパブリックアートを見つけ，写真に収める）という実践を行い，パブリックアートに対する見方や認識を深めた．

「富山のここにこんなパブリックアートを」の実践

この実践は，「地元富山にパブリックアートを設置するとしたら」という前提で，パブリックアートのマケットを制作するものである．生徒には，「市民や子どもたちに愛されるパブリックアートとは？」「設置環境とマッチする造形や機能は？」「富山をアピールするパブリックアートとは？」等の，社会と関わるパブリックアートのあり方としての課題を投げかけた．

制作方法については，生徒同士が「協働」を基本に進めていくという意味で，パブリックあるいは社会につながる「共同制作」とした．共同制作のグループは，５人１組でその内訳は，」

「班長」（１名）…グループ内の討論の進行役を中心に，マケット，プレゼンテーション担当者の補助も行う．

「マケット担当」（２名）…グループのアイディアをもとにマケットを制作する．

「プレゼンテーション担当」（２名）…最後の時間に設定した発表会に向けて，パワーポイントを中心とした説明資料を作成する．

という役割分担で取り組んだ．

授業は，以下の流れで展開した．

㈰パブリックアートのコンセプト検討会…グループ毎に，どこに，どんなパブリックアートを作るかの話し合い．

㈪制作…グループのコンセプトをもとに，マケット作成，プレゼンテーション資料作成を，役割分担して同時に行う．

㈫発表会…プレゼンテーション資料，マケット等によるグループ毎の発表．

「富山市のパブリックアート―中学生からの提言―」展による社会への発信

完成した作品全32 点を，上記展覧会で社会に発信した（本年５月 16 ～19 日「ＮＨＫとやまぎゃらりー」にて）．展示は，マケットだけでなく，設置場所とマケットの合成写真や，各作品の説明文により観覧者にわかりやすい展示を心がけた．幸いなことに，ＮＨＫ総合テレビ「とやまおしらせたまご」（５月 15，16 日）での展覧会案内，朝日新聞朝刊，北日本新聞朝刊（５月 17 日），北日本新聞夕刊（５月 22 日）に記事あるいは特集として紹介され，社会へ発信する意図が，より効果的に機能した．

展覧会終了後の生徒，保護者，一般観覧者の感想をいくつか紹介する．

「中学生が，社会の一員であるというか，社会に参加している実感をもてたのではないかと思う」（生徒・女子）

「公共物に対して，関心をもって見ることにより，富山市のよさも再確認できたのではないかと思いました」（保護者）

「全部とは言えませんが，中には是非実現できればおもしろいもののいくつかがありました」(一般女性・60 歳)

終わりに

社会に発信する取り組みは，擬似体験から現実感のある体験への転換でもある．また，地元を舞台として展開したことにより，郷土富山を見つめ直す機会ともなった．

観覧者の意見にあった，実際の設置に至るようなことになれば，この実践はより現実感を増すものとなる．その際，中学生と大人(市民・美術関係者等)との話し合いをはじめとする協働作業も必要となろう．

今回の実践を通じ，社会と関わるパブリックアートの，教材としての可能性や将来に向けての展望を見出せたように考えている．

「富山市のパブリックアート―中学生からの提言―展」
会場風景

生徒作品「はい上がるみんなの手」
(生徒による解説)じゃんけんというのは平等で公平です．それに言葉が通じなくても誰でも参加することができます．そのような世界が一つに，平和になるようになってほしいです．設置場所の理由…富岩公園には大きな橋があります．世界の人と人との架け橋となる大きな橋が必要だったので富岩公園にしました．

＊　＊　＊

特集「元気なヒト，げんきな活動」3

―思えば遠くに来たもんだ―

徳　雅美
(カリフォルニア州立大学チーコ校
The California State University, Chico)

「何か美術に関する仕事につければ．できたら美術館で．」という程度で明確なプランもなく10 年勤めていた総合化学研究所を辞め，イリノイ大学(The University of Illinois at Urbana-Champaign)へ編

入すべく片道切符を手に成田よりシカゴへ向けて飛び立ったのは忘れもしない1989年7月24日のこと．その後1991年1月，シカゴにあるシカゴ美術学院（Ｔｈｅ School of the Art Institute of Chicago）の芸術学部に編入しなおし1992年夏に卒業．同年イリノイ大の美術教育大学院に入り，全てを終えたのが1998年1月．そのまま臨時講師として同大学美術教育学部に一年ほど勤務し，現職であるカリフォルニア州立大へ助教授として招かれたのが翌年の1999年夏．渡米してからちょうど10年目のことである．現在日本を離れて丸14年．思えば遠くに来たものである．

最近，日本人の学生に米国の大学で生き残れるこつはと聞かれることがある．こつなどない．が，生き残るための条件というものはあるらしい．先日，日本の週刊誌を手にしておもしろい数字を見つけた．ある統計によると（確か「サンデー毎日」か「週刊朝日」での情報だと思う），年間約8万人の日本人がアメリカに留学しており，無事卒業できるのは約4千人だそうである．この数字は大学，大学院等の内訳，さらにどういう条件で留学したかの詳細が掲載されていないので，非常に大ざっぱな統計であるのは否めないが，それでも単純計算にして20人に一人，全体の約5％しか生き残れなかったことになる．

さて，留学で生き残る三つの条件である．1）経済力2）英語力3）忍耐力だそうである．なるほどと思う．まず，1）の経済力．これは言わずもがな，お金のことである．学生という条件で渡米する以上，基本的に米国での就労は許されないので，留学期間の学費，滞在費，諸経費を含めて一年分の必要額を「銀行証明」という手段で明示しないと学生ビザ（F1）は下りないことになっている．米国の大学から奨学金を貰えるのはごく限られた学生だけなので，ほとんどの場合は親か自分で用意することになる．比較的学費の安い州立大に行くとしても，少なくとも初年度は諸経費含めて約2万米国ドルが必要となる．これの4年分を計算すると，実に頭が痛くなる額である．次に，2）の英語力．米国の大学で学ぶことを目指しているのなら，日本においては寧ろ，英語で「読む」「書く」を中心に勉強し，「聞く」「話す」は米国にきてから，その環境の中で徐々に慣れていくしかないような気がする．習った英語と実際使う英語はかなり異なるものである．最後の「忍耐力」．実は個人的にはこれが一番重要な要素だと思っている．我々は好むと好まざるとに関わらず自分の生きてきた社会（母国）で培われた価値観というので物事を判断しがちである．多文化国家である米国のような国で生きていくためには，各文化により価値観が多様であることを再認識する必要がある．つまり自分の価値観だけで相手をそして相手の文化の善し悪しを判断しないこと．実はこれが意外と難しい．そして外国にでると必ず感じる差別（discrimination）偏見（bias）というものに立ち向かわなければいけない．英語にハンデのある外国人学生が米国学生と同等の権利を得るためには，それに伴う義務もきちんと果たすべく，ひたすら忍耐を持って努力することしかないわけである．その努力を楽しんでやれるかどうかが生き残れるかどうかに大きくかかわってくるのではないかと思う．

振り返ってみるに，私の場合は強いていえば，たぶんこの3つめの条件に叶っていたのだと思う．逆説的になるが，将来絶対これになりたいという確固とした信念など持たずに，日々のことを少しずつこなしてきたのが良かったのかもしれない．就職のためとかではなく自分のために勉強できたこと，あの１０年間は苦しくもあったがそれだけで本当に楽しかったのである．

さて，これから留学をと考えている学部生，院生の皆さん．まずは夏休みを使っていくつか候補の大学を自分の足で回っ

て見ることをお勧めする．自分で調べ，自分の目で見，自分自身で選択すること．これが後悔しないこつである．例え，うまくいかなかったとしても，他の国で勉強し自分の国を外から見る経験は目から鱗のはずである．そして，いつかきっとその経験は（その時に得た友達も含めて）あなたにとって最高の宝物になるはずである．

「美術教育の理論と実践」の授業
（主に将来小学校教諭になる学生のためのクラス）で，
徳氏が学生にアドバイスしている場面

今回は，松田氏の＜地域社会への発進型の教育実践活動＞，徳氏の＜若手会員向けのメッセージ＞を掲載しました．おそらく多くの会員の明日への活力になったことと思います．今後も，このような「元気なヒト，げんきな活動」を報告したいと思いますので，情報をお寄せ下さい．（自薦，他薦を問いません．）

また，平成15（2003）年度科学研究費補助金や国内外の民間団体の補助金など外部資金の獲得状況もお知らせください．研究テーマ，　担当代表者（所属），金額などです．

〒630-8528 奈良市高畑町　奈良教育大学
宇田秀士，電話・FAX　0742－27－9223
Eメール udah@nara-edu.ac.jp　まで．

学会役員会が開催されました

代表理事　柴田和豊（東京学芸大学）

８月29日に恒例の美術科教育学会夏季役員会が開催されました。当日の報告事項・議事項目を掲載しておきます。

日時：平成15年8月29日　13時～17時
場所：ぺんてる本社ビル14階　大会議室
参加者：柴田　ふじえ　宮坂　赤木
新井　宇田　大橋　岡崎　金子
花篤　辻　仲瀬　長田　長谷川
浜本　増田　宮脇　三根
（敬称略）

I 挨拶　代表理事　柴田

II 報告

1，地域研究発表会の実施報告および今後の予定
2，学会誌編集委員会の報告
3，日本学術会議関連の報告
4，各部会からの報告
・アートセラピー部会
・授業研究部会
・データベース部会
・国際交流部会
・美術教育史部会
5，選挙管理委員会から

Ⅲ議事

１，今後の活動方針について

・　学会あり方委員会について

２，地域研究発表会のあり方について

・名称について

・担当者について

・本部からの補助について

・広報について

・発表者について

・その他

３，学会誌編集について特に学会賞、版権、著作権問題について

・査読について

・学会賞について

４，データベース部会の「事業部」構想について

５，第２６回美術科教育学会（広島大会）について

・日程：平成１６年３月２０日・２１日

テーマ：美術教育の今を見つめて（仮）

その他

選挙管理委員会から

＊　＊　＊

新刊のお知らせ

『美術鑑賞宣言－学校＋美術館』

山木朝彦・仲野泰生・菅　章
編著

現代のアートに関心がある人なら誰もが気になるアーティストたちの作品について、わかりやすく解説し、批評している美術書です。絵画や彫刻，それにインスタレーションなど，従来，美術鑑賞の対象とされてきた作品はもちろんのこと，写真や漫画やファッションやデザインなどの作品に関する叙述に多くの頁を費やしています。また、随所に、音楽や文芸とのかかわりを意識して書かれたエッセイがちりばめられており、その意味でも、本書で扱う「美術」は「アート」の意味に近いものです。

本書では「鑑賞」を一人ひとりが感じ、考えるプロセスとしてとらえ、作品へのアプローチの実例をお見せできるように、新進気鋭の学芸員や研究者が自らの鑑賞体験を語りました。ですから、どの箇所も単なる解説を越える個人の視点が織り込まれた批評となっています。

後半は、美術鑑賞を学校や美術館で行なう際に、どのような観点から鑑賞の場をつくり、どのような展開が可能なのかを理論的、実践的に検討したパートです。教師や学芸員にとって、直接、役立つ様々な方法論が提示され、探究されています。

（赤木里香子）

書名『美術鑑賞宣言－学校＋美術館』
編著者－山木朝彦・仲野泰生・菅　章
（執筆者総数三九名）
発行日－三月二五日，価格：三〇〇〇円（税別），
総頁数－三七六頁（色刷り三二頁）
出版社－日本文教出版